青森保健大雑誌　7(1), 27－36 , 2006

〔資料〕

青森県立保健大学における主体的学習者育成システムの現状と課題

小山　敦代[1)]　浅田　　豊[2)]　坂江千寿子[5)]　岩月　宏泰[3)]
千葉多佳子[4)]　鈴木　孝夫[3)]　佐藤　恵子[4)]
アラン・ノールズ[2)]　中村　恵子[1)]

The actual situation and some problems of the active students training system in AUHW

Atsuyo Koyama [1)]　Yutaka Asada [2)]　Chizuko Sakae [5)]　Hiroyuki Iwatsuki [3)]
Takako Chiba [4)]　Takao Suzuki [3)]　Keiko Sato [4)]
Knowles Alan [2)]　Keiko Nakamura [1)]

Abstract

In this university, the "active students training system" which makes personnel training for human care practicing possible is built, and its best is done in the educational practice.

The "active students training system" means as the viewpoints.

(1) Students can find out problems (study subjects).
(2) They can recognize targets and the contents.
(3) They can be getting to know the studying resources and techniques.
(4) They can study and advance.
(5) They can express the results of their study.
(6) They can use their learning output in the lifelong learning stages after graduation.

Then, the purpose of this paper is to report the outline of an "active students training system" and to report the results of an investigation for teachers in this university.

The purpose of the investigation is to clarify the actual condition of the system through teachers consciousness and to consider as the basic data connected to a future improvement.

The subjects of the investigation were 53 tenured teachers (above the lecturers except for the teachers who retired at the end of March), and the investigation period was from March 17, in 2003 to March 31 in 2003.

From the results of an investigation, it has become clear that every teacher has been promoting the activities to train active students since the establishment.

It is required to make efforts from now on aiming at the further development of this system and the continuous verification.

1）青森県立保健大学健康科学部看護学科
Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare
2）青森県立保健大学健康科学部人間総合科学科目
Division of Human Sciences, Faculty of Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare
3）青森県立保健大学健康科学部理学療法学科
Department of Physical Therapy, Faculty of Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare
4）青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科
Department of Social Welfare, Faculty of Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare
5）茨城キリスト教大学看護学部
Department of Nursing , College of Nursing , Ibaraki Christian University

(J.Aomori Univ.Health Welf.7(1): 27－36 , 2006)

キーワード：主体的学習者、育成システム、大学教育
Key Words：active learning students , educational training system, higher education

はじめに

文部科学省は、平成15年度から「特色ある大学教育支援プログラム」(特色ＧＰ)による大学支援を開始した。それは、大学における教育改革の取組みを一層推進するため、教育改善に資する様々な取組みを募り、特色ある優れたものを選定して公表すること等によって他大学の参考に供するとともに関連支援経費による重点支援をねらいとしたものである。本稿は、平成15年８月、第１回「特色ある大学教育支援プログラム」に応募した「主体的学習者育成システム」の概要、並びにその検証のひとつとして「主体的な学習態度育成の教育活動」について教員を対象に実施した質問紙調査、インタビュー調査結果の一部を報告するものである。なお、調査の実施時期は、開学年に開始した第一次カリキュラム（旧カリキュラム）の最終年度末の平成15年３月であり、４月からは第二次カリキュラム（新カリキュラム）に移行している。

Ⅰ．本学の教育の概要

本学は、保健医療福祉マンパワーの充実・確保という地域の要望に応え、保健医療福祉の専門職としてヒューマンケアを提供できる人材の育成をめざし、健康科学部に３学科（看護学科・理学療法学科・社会福祉学科）及び健康科学研究研修センターを有する大学として平成11年４月に開学した。平成15年３月には、初の卒業生を社会に送り出し（就職率98%）、５年目から編入学生の受け入れ、大学院開設、さらに健康科学研究研修センターを健康科学教育センターと研究センターに改組して更なる教育・研究の充実を図っている。

教育理念は、①人間性豊かな人材の育成、②保健医療福祉の発展に寄与できる人材の育成、③地域特性へ対応できる人材の育成、④国際性を備えた人材の育成、⑤地域社会への貢献、である。教育理念に基づきカリキュラムは、教養科目にあたる３学科共通の人間総合科学科目、他学科の科目を自由に選択できる共通選択科目、専門教育を支持する専門支持科目、専門科目の中で核となる基幹科目、それぞれの専門職としての知識・技術を応用・実践する展開科目から構成される。学部教育では、各学科独自のカリキュラムを履修することにより「専門性（Professionalism)」を育み、さらに専門性を尊重しながら専門職間の「連携･協調（Coordination･Collaboration)」を図る共通の履修科目を設定し、ヒューマンケアを実践･統合して、「健康と生活の質の向上」に貢献できる看護師･保健師・助産師・理学療法士・社会福祉士の人材育成を目指している。人々の生命や生活に関わるこれらの専門職には、人間性と専門的知識に基づいた判断力・技術力をもち、主体的に行動できる人材が求められる。そこで本学では、これらの人材育成を可能とする「主体的学習者育成システム」を構築し、その教育実践に努力している。なお、同システムの内容は次に詳述する。

Ⅱ.「主体的学習者育成システム」の概要と教育的位置付け

変革の時代といわれる21世紀、人々の生命や生活にかかわる保健医療福祉の専門職には、倫理観に富む豊かな人間性、理論的知識に基づいた判断力と専門的技術、多職種間連携による問題解決能力、さらに専門性を発展させるポテンシャル等を有する主体的学習者としての態度と行動力が求められる。それらは学生時代に自らの主体的な学習によって培われるものであり、保健医療福祉の専門職をめざす学生にとって重要な基盤となる。また、国家資格を得た後もその専門性を高めるためには、継続して主体的に学習する態度と行動力が不可欠である。そこで、本学では「主体的学習者育成システム」として、開学前から意識的な教員採用やカリキュラム編成を行い、開学後は学生の主体性を育む教育活動に向けて、教員の力量形成、教育・研究助成や環境整備の支援体制など、大学として組織的に取組んできた。本システムのねらいは、学生自らが主体的に問題を発見・判断し、解決方法を見出して対処できる実践能力と生涯学習する主体的学習態度を培うことによって、将来、保健医療福祉の専門職としての社会貢献を期待するものである。

主体的学習者の育成システムとは、図１に示すとおり、主体的学習者育成を主軸とした「カリキュラム編成」と「主体的学習態度育成の教育活動」であり、加えて本システムを強化する教員の力量形成、評価制度、ならびに支援体制から構築されるものである。カリキュラムは、教養を育む３学科共通の人間総合科学科目と共通選択科目、専門支持科目、基幹科目、展開科目を楔形配置とし、講義、演習、実習をとおして知識・技術・態度の統合をはかり、段階的に主体的学習態度育成を意図した編成である。

「主体的学習態度育成の教育活動」の視点は、①問題（学習課題）を見出すことができる、②学習目標や内容を自ら認識することができる、③学習資源や手法を知り

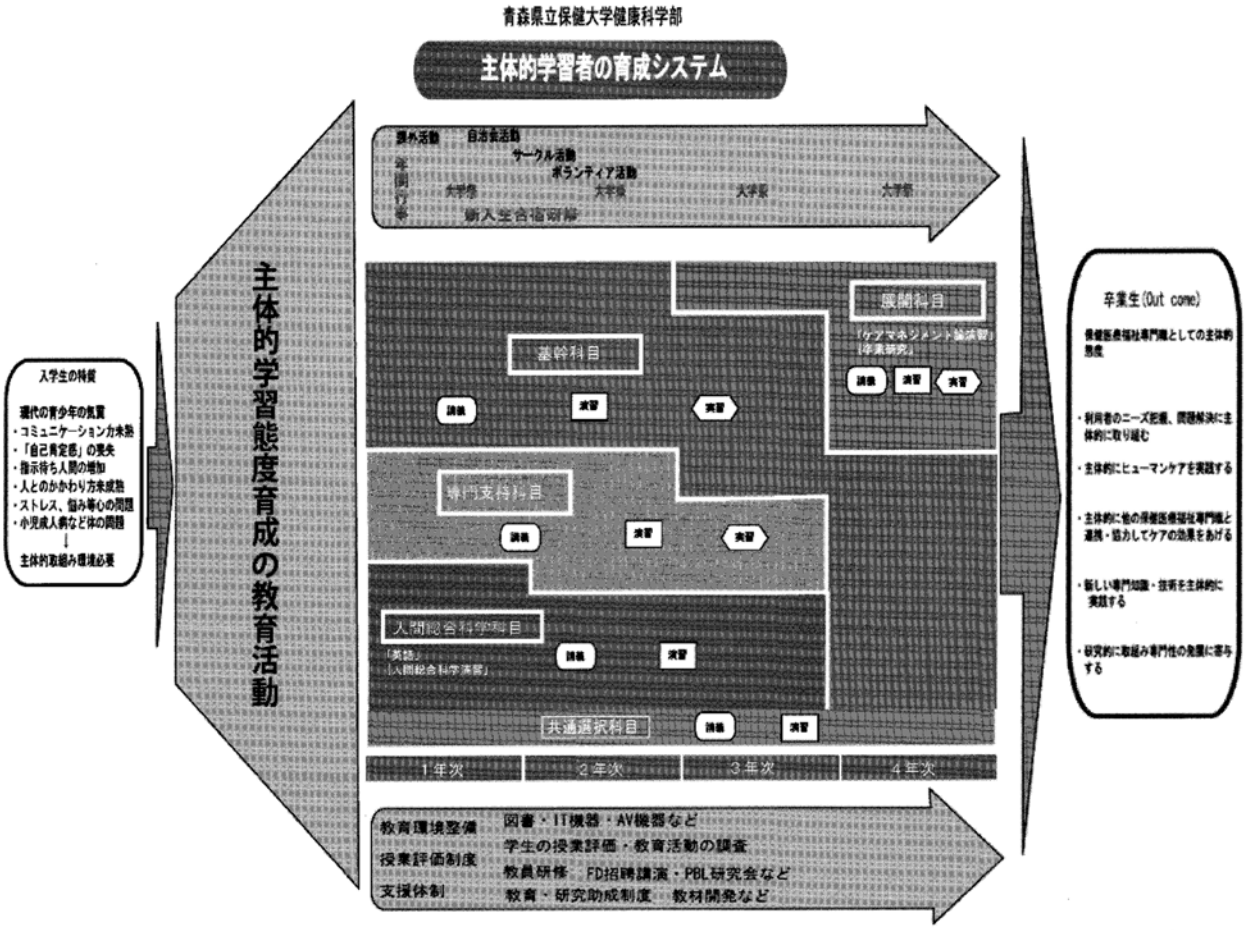

図１　主体的学習者育成システム

活用できる、④自己学習を進めることができる、⑤成果や結果を口頭や文章で表現することができる、⑥学びの成果を様々な場で活用することができる、の６点である。これらを教員間の共通認識のもとに、少人数教育や問題基盤型学習（PBL：Problem Based Learning）などの教育方法、教材の工夫・改善などに努力して教育効果を上げる活動である。そのための教員の力量形成として、教員研修（ＦＤ）や教育研究会・教員会議での意見交換会などの機会を設定している。併せて「評価システム」として、学生による授業評価や教員の教育活動に関する調査の実施、「支援体制」としての教員に対する教育・特別研究助成、学生研究活動の助成制度とともに教育環境整備など、組織的に主体的学習者育成システムの構築と適用に取組んできた。その組織的対応の取組みと実績を図２に表わした。

Ⅲ．主体的学習者を育成するための教育実施状況

「主体的学習態度育成」の教育実施状況としては、本学の特色を有する３学科共通の『人間総合科学科目』における１年次の【英語】【人間総合科学演習】、及び『展開科目』における４年次の【ケアマネジメント論演習】【卒業研究】を事例科目としてとりあげた。

１．『人間総合科学科目群』における事例科目

【英語】１年次前期及び後期、８単位（240時間）の必修科目

目標：英語を用いてのコミュニケーション能力の向上

実施状況：計160人の学生が受講。１クラスの学生数は13～20人であり、徹底した少人数クラスでの語学教育である。また、フルタイムのネイティブ・スピーカーである担当教員５名がチームとして絶えず協議して教育方法の工夫・改善を行っている。さらに、授業方法としてペアもしくは小グループでの会話形式を中心に進めることや、各クラスにつき教員２名が責任をもって受け持つチーム・ティーチングのスタイルをとっていること、話す・聞く・読む・書くの４つのスキルを統合しながら授業を展開している。これらはLT（Language Technology）教室の活用によって自主的に深め、最終時間には学生が創る英語劇コンテストによって評価し他の教員にも公開している。

【人間総合科学科目演習】１年次前期、２単位（60時間）の必修科目

目標：演習では、自己学習能力育成、ディスカッション

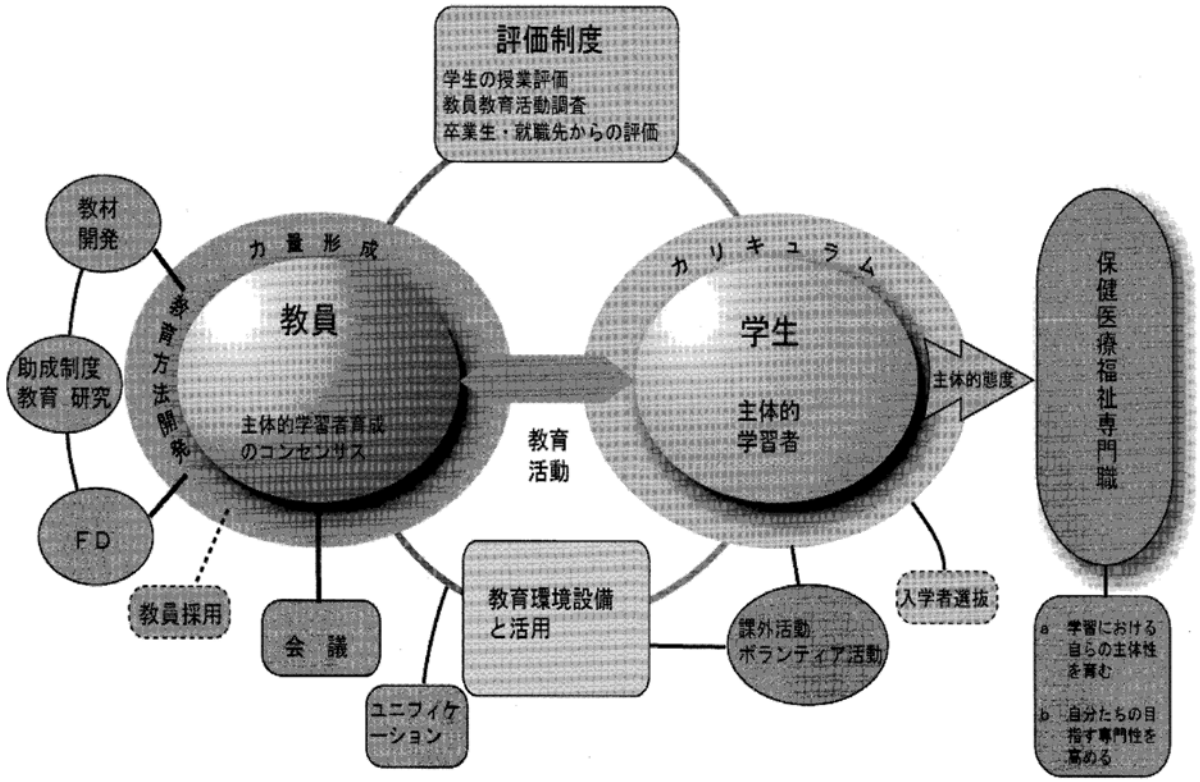

図２　組織的対応の取組と実績

能力、ディベート能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、調査研究能力、論文作成能力の涵養と思考の自立に主眼を置き、学習成果として論集の発行を最終目標とした。

実施状況：計160人の学生が受講。担当教員数は８人（14年度）から13人（11年度）であり、教員一人当たりの学生数は12～20人程度。演習では、主体的な態度として期待する６項目をバランスよく達成できたと捉えることができる。換言すれば、少人数での討議や論文作成などの学習を体系的に重ねることで、学習への積極性や主体性が育成されたと評価できる。達成度評価については、出席、学習意欲、レポート（論文）作成、グループでの研究発表などにより評価してきた。学習の成果は、毎年『ゼミ論集』という形で出版してきた。

２．『展開科目』における教育実施状況事例科目

【ケアマネジメント論演習】４年次後期、１単位（30時間）の必修科目

目標：保健医療・福祉領域に実在する事例を課題としたフィールドワークを行い、他職種チーム連携を経験し、現在利用中のサービスを理解した上で理想のケアプランを作成・評価する。

実施状況：演習の概要は３学科混合チームを16グループ構成し、積極的に情報提供と意見交換をする経験を積むが、学生達は「目標の達成度は80％以上」と高く評価していた。また、指導教員８名は助手とペアで担当し、授業開始の１年前から基本的概念や用語の共通理解、住宅改修の専門家を招いた勉強会等の事前準備を進めてきた。学生の学習態度については、各専門職用語を理解するための積極的な意見交換と各学科に対応させた討議経過に注目し、６つの視点のうち、③学習資源や手法を知り自ら活用する、④自己学習を進める、⑤学習の成果や結果を口頭や文章で表現する等の能力は高いとしていた。この科目は４年次後期に履修し、将来的に自立、かつ連携しながら専門職としての機能を果たすための動機づけとして、演習プロセス自体が学生の主体性を育む科目である。

【卒業研究】４年次通年、４単位（120時間）の必修科目

目標：自ら研究テーマを決めて取組み、論文作成までのプロセスを通して主体的に研究を続けていく基盤となる思考と態度を養う。

実施状況：各学科の展開科目であり、学生の希望にそって講師以上の教員が指導する。学生は、後援会からの研究助成金を得て、時間・方法・物的資源等をマネジメントしながら、学外の対象者や管理者への協力依頼や調整等を経験し、主体的態度を身につけていく。卒業論文は、学生個々が完成させ、学外者の参加も得て発表会を行っている。卒業研究終了後の満足度も高く、専門職業人と

して将来にわたり研究活動を続け、自らの専門性の発展に向けて努力するための基盤が造られ、主体性を育む効果の高い重要な科目である。

Ⅳ.「主体的な学習態度育成の教育活動」の検証としての調査結果

「主体的学習者育成システム」検証のひとつとして、各々の教員が担当科目において、「主体的な学習態度育成の教育活動」をどのように行っているか実態把握を行い、今後の改善に資することを目的に質問紙調査、インタビュー調査を実施した。

1．目的

「主体的な学習態度育成の教育活動」は、どのような科目でどのように意識して行っているか、実態を明らかにし、今後の改善に結びつける基礎資料とする。

2．方法

1）質問紙調査

対象：平成15年３月本学在職教員53名（３月末で退職する教員を除く講師以上）

調査期間：平成15年３月17日～３月31日

調査内容:「主体的な学習態度を育成する」ことの意識と科目、並びに主体的学習態度育成について、６つの視点（①問題・学習課題を見出すことができる、②学習目標や内容を自ら認識することができる、③学習資源や手法を知り活用できる、④自己学習を進めることができる、⑤成果や結果を口頭や文章で表現することができる、⑥学びの成果を様々な場で活用することができる）からの選択、及び主体的な学習態度の評価等

調査方法：質問紙調査用紙を配布し、回答は無記名とした。

2）インタビュー調査

対象：４年次の３学科共通科目である「ケアマネジメント論演習」担当教員16名の内、協力と承諾の得られた10名

調査期間：平成15年６月10日～６月20日

方法：１人、約15分間のインタビュー調査

内容：４年次に３学科合同で実施の「ケアマネジメント論演習」の担当者として、主体的態度育成の６つの視点がどの程度育成されていると思うか。なお、このインタビューの位置づけとしては、ケアマネジメント論演習の授業科目における教授・学習過程において、学生が主体的態度育成の６つの視点にどの程度到達したかに関し、教員の立場から評価を行なったものである。

3）倫理的配慮：調査の主旨と目的、データは目的以外に使用しないこと、個人が特定されないことを明記した文書を各教員に配布するとともに教員会議等において説明し協力を求めた。インタビューについては、個別に依頼し協力と承諾を得た。

3．結果と考察

1）教員の授業取組みの意識

表１　教員所属別回答者数と述べ回答科目数

所属	回答者（名）	述べ回答科目数
人間総合科学科目	8	16
看護学科	18	47
理学療法学科	12	39
社会福祉学科	10	19
合計	48	121

表１のとおり、回答者は48名（回収率は90.6%）で、述べ回答科目数は121科目であった。また、「主体的な学習態度を育成することに意識しているか」については、48名全員が「意識している」と回答しており、本学教員は、主体的学習態度育成を意識して教育活動を行っていた。

2）教員の所属別にみた「主体的な学習態度育成の視点の意識と科目」、「学生の主体的な学習態度の評価」

「主体的な学習態度育成の視点の意識と科目」、及び「学生の主体的な学習態度の評価」について、教員所属の人間総合科学科目・看護学科・理学療法学科・社会福祉学科別にみた結果と考察は以下のとおりである。

《人間総合科学科目》

（1）「主体的な学習態度を育成の視点」の意識と科目

「言語とコミュニケーション」を主に担当の４名を含む８名の教員から回答を得た。科目数としては、１～３年次の全５科目群33科目の中から、科目を特定したものとしては英語科目５科目、その他の講義・演習５科目の計10科目、科目を特定しないものとして、１件の回答があった。さらに、「人間総合科学演習」など同一科目を別の教員がそれぞれ回答した点を含めると延べ15件の回答があった。そのうち、「主体的な学習態度を育成する」６つの視点について尋ねた結果、表２のとおり９科目の回答

表２　【人間総合科学科目】「主体的な学習態度を育成する」ことの視点の意識と科目

学年	科目	①問題（学習課題）を見出す	②学習目標や内容を自ら認識する	③学修資源や手法を知る	④自己学習を進める	⑤成果や結果を口頭や文書で表現する	⑥学び方を様々な場面で活用する
1年次	1	●	○	○	●	●	●
	2	●			●	●	●
	3	●			●	●	●
	4	●	○	○	●	●	●
2年次	5	○					
	6	○					○
	7		○				
3年	8	○	○	○		○	○
	9	○	○	○		○	○
合計		8	5	4	4	6	7

6項目全て該当科目　　学年別に6つの視点から該当が多いもの●

があり、６つの視点すべてに該当すると回答したのは２科目であった。項目別では、①「問題（学習課題）を見

出す」が８科目と多く、次いで、⑥「学びの成果を様々な場で活用する」７科目、⑤「成果や結果を口頭や文章で表現する」６科目、②「学習目標や内容を自ら認識する」５科目、③「学習資源や手法を知り活用する」４科目、④「自己学習を進める」の順であった。また、学年別に６つの視点の該当が多いものを●で表示すると、１年次の科目において、課題を見出し、自己学習を進め、口頭や文書で表現し、様々な場面で活用することを意識していることが明らかになった。

人間総合科学科目の特質としては、１年次前期配当科目の「人間総合科学演習」において、主体的学習能力全般の涵養をねらいとしているが、４名の教員が主体的学習態度を意識する科目と回答しており、ねらいどおり主体的態度育成を意識している科目であることが確認できた。

（２）主体的な学習態度の評価

次いで、学生の主体的な学習態度について、何を目安（尺度・基準など）に判断にしているかについて質問した結果、「コミュニケーション能力を図る口頭テスト」2件、「レポート」2件、「表現力（話す、書く）を図るテスト」、「自己評価のためのアンケート」、「グループワークや発表の参加度」が各１件であった。

《看護学科》

看護学科教員は18名から回答があり、延べ科目数は47科目であった。

（１）主体的な学習態度を育成することへの視点の意識と科目

担当している科目において、「主体的な学習態度を育成する」ことを意識しているかどうか、担当科目ごとに６つの視点について尋ねた結果、表３のとおり40科目の回答があった。６つの視点すべてに該当すると回答したのは17科目であり、視点別にみると、③「学習資源の活用」が29科目と多かったが、他の項目についても19～29科目とばらつきが少なく、看護学科の教員は、教授活動において、主体的な学習態度を育成することを意識していることが確認できた。１年次は、課題を自ら見出し、学習資源や学び方を知るという回答が多く見られた。２年次では、６つの視点が全体的に網羅されており、実習科目が多く含まれることもあってか、主体的な学習態度を育成する科目が配置されていると考えられた。つまり、２年次は、１年次に比べれば、飛躍的に主体的な学習態度を育成できる学年とも言える。さらに、３年次は自己学習を進め、学習効果を他者に伝える能力を高め、４年次では最終年度となり、卒業研究など自発的な取り組みが求められることと、３年次までの基盤を発展させる傾向がうかがえた。

（２）主体的な学習態度の評価

表３　【看護学科】「主体的な学習態度を育成する」ことの視点の意識と科目

学年	科目	①問題(学習課題)を見出す	②学習目標や内容を自ら認識する	③学修資源や手法を知る	④自己学習を進める	⑤成果や結果を口頭や文書で表現する	⑥学び方を様々な場面で活用する	学年ごとの特徴
1年次	1	●		●				課題を自ら見出し、学習資源や学び方を知る
	2	●		●				
	3	●	○	●	○	○	○	
	4			●				
	5	●	○	●			○	
	6	●	○	●	○	○	○	
	7	●	○	●	○	○	○	
	8	●		●	○	○		
	9	●						
	10		○					
2年次	11	●	●	●	●	●	●	集中的に主体的な学習態度を育成する
	12	●	●	●	●	●	●	
	13	●	●	●	●	●	●	
	14			●				
	15	●	●	●	●	●	●	
	16	●	●	●	●	●	●	
	17	●	●	●	●	●	●	
	18	●	●	●	●	●	●	
	19	●	●	●	●	●	●	
	20				●			
	21			●				
	22		●					
3年次	23	○	○	●	●	●	○	主体的に学習効果を他者に伝える学年
	24						○	
	25	○	○	●	●	●	○	
	26			●				
	27		○	●				
	28	○	○	●	●	●	○	
	29	○	○	●	●	●	○	
	30				●	●		
	31				●	●		
	32					●		
	33			●		●		
	34					●		
4年次	35	○	○	○	○	○	○	3年生までの学習を基盤に発展させる学年
	36				○			
	37			○		○		
	38	○	○	○	○	○	○	
	39		○					
	40			○				
合計		22	22	29	22	24	19	

6項目全て該当科目　　学年別に6つの視点から該当が多いもの●

学生の主体的な学習態度を高めていることについて、何を目安（尺度・基準など）に判断しているかについて質問した結果は表４のとおりである。

表４　看護学科：主体的学習態度の評価（重複回答）

項　　目	記述数	合計
参加態度	6	16
出席	3	
反応、表情、活気，やる気、意欲	4	
授業内外の質問	3	
提出物、レポート、実習記録	5	13
試験（実技を含む）	4	
グループワークの成果（レポート、発表）	4	
学生による授業評価	5	15
授業毎の感想質問などの記載	4	
授業毎の学びのまとめ、印象に残ったこと	2	
授業毎の学生自己評価	2	
授業前と修了後の比較（アンケート）	1	
教員による学生の評価	1	
自己学習資料、自己学習課題：量と質	3	6
教員作成によるビデオ教材の活用調査	1	
授業後に実習場でも活用、学習態度等	1	
臨地実習での活用度と自己学習資源の調査	1	

教育方法の評価に対する目安としては、質問や会話の内容、参加態度が多く、次いで提出物レポート、試験などの成果物、学習結果、授業評価、学生へのアンケート、

感想、自己学習資料の量と質を点検する、提出された成果物のチェック、教材の活用度調査、実習場での学習資源の活用程度の観察などがあげられた。また、評価方法を、上述した６つの視点で分類すると表５のようになった。

表５　看護学科：評価方法を６つの視点で分類

目標 評価尺度	①学習課題を見出す	②学習目標・内容の認識	③学習資源の活用	④自己学習を進める	⑤学習成果を表現する	⑥学びの成果を活用
記述内容	質問感想 参加態度	GWの態度 参加度 授業の反応 感想	自己学習資源の調査	自己学習資料 技術試験結果	試験 レポート プレゼンテーション	授業後臨地実習での活用度調査
記述した人数	16	15	2	4	13	2

た。表現能力、成果物は評価しやすいが、資源の活用や自己学習を進めるという部分は教師の目に触れにくく、６つの視点の中で評価しにくいものがある。主体性は学生生活全般、むしろ学科外活動においての評価が重要であり、授業科目の評価だけでは限界があることも明らかになった。

《理学療法学科》

理学療法学科では12名の教員から回答があったが、本調査は本学完成年度前の学年進行中に実施のため、４年次配当科目を除いた39科目に留まった。

（１）主体的な学習態度を育成することの視点の意識と科目

回答者の担当している授業において、「主体的な学習態度を育成」の６つの視点で見た結果、表６のとおり、⑥「学び方の活用」18科目、③「学習資源の活用」16項目と多く、次いで②「学習目標の認識」13科目、⑤「成果の表現」12科目の順で多かった。また、６つの視点全てを選択したものは５科目（16.7%）であった。

表６　【理学療法学科】「主体的な学習態度を育成すること」の視点の意識と科目

学年	科目	①問題(学習課題)を見出す	②学習目標や内容を自ら認識する	③学修資源や手法を知る	④自己学習を進める	⑤成果や結果を口頭や文書で表現する	⑥学び方を様々な場面で活用する
1年次	1			●			
	2			●			
	3			●	○	○	●
	4			●	○	○	●
	5	○	○	●	○	○	●
	6			●			●
	7			●			●
	8	○	○	●	○	○	●
	9						●
	10		○				
2年次	11			●			
	12		●			○	
	13	○	●	●	○	○	●
	14	○		●			
	15		●				
	16	○	●	●	○	○	●
	17		●				
	18		●				
	19			●			●
	20			●			●
	21	○	●	●	○	○	●
	22						●
	23						●
	24					○	●
	25				○	○	●
3年次	26	○	○		○	○	
	27	○	○	○	○	○	○
	28						○
	29		○				
	30	○					
合計		9	13	16	10	12	18

6項目全て該当科目　　学年別に6つの視点から該当が多いもの●

各学年配当科目別に６つの視点の選択状況をみると、１年次、２年次は学習資源の活用や成果の表現を選択しているが、３年次では６つの視点が全体的に網羅されていた。１年次では基礎医学や理学療法の基礎を主とした専門支持科目が占めることから自己学習が促され、また実習では口頭試問が繰り返されることから、主体的な学習態度の成果の表現が育成されるものと考えられる。これらの項目は２年次でも同様に多くの科目で選択されており、学生の主体的な学習態度を育成するうえで適正な科目の学年配置がされていると考えられた。さらに、３年次では初期総合臨床実習に向けて、更なる自己学習を進め、学習効果を他者に伝える能力を高めていることが推測される。

（２）主体的な学習態度の評価

この設問では回答者が学生の主体的態度を促す教育のために実施している評価を問うているが、回答の多い順にみると表７のとおり、授業中の学生の反応16科目、提出物、レポートの内容11科目であった。その他、学生からの質問や会話の内容、参加態度、授業評価などが挙げられた。

表７　理学療法学科：主体的学習態度の評価（重複回答）

項　　目	記述数	合計
参加態度	4	
出席	2	
反応、表情、活気，やる気、意欲	16	24
授業内外の質問	2	
提出物、レポート	11	
試験	5	19
グループワークの成果と報告	3	
学生による授業評価	6	6

《社会福祉学科》

（１）主体的な学習態度を育成することの視点の意識と科目

社会福祉学科の教員が、担当する授業科目において、「主体的な学習態度を育成する」ことを意識しているかに対し、10名中８名の教員が「意識している」と回答していた。また、この質問に対して「ほとんど意識していない」と回答した教員が２名あるが、そのうち１名は、複数科目を担当しており、「主体的な学習態度を育成する」ことを意識する、あるいはしないというのは、科目の特性によるもので、いくつかの科目においては、「意識している」と自由記述の中で述べていた。また、もう１名の教員は、「大学生の学習とは本来主体的なものだという前提がある」としており、学生は主体的に学ぶもので

あるということが出発点となっていることがうかがわれ、教育目標を念頭におき、授業を進めていることが推察できた。このことから、社会福祉学科の全教員が、本学の教育目標及び学科の目標を常に念頭におき、「主体的な学習態度を育成する」ことをねらいとして授業指導を行っているといえる。次いで、社会福祉学科の教員一人一人が、「主体的な学習態度を育成する」6つの視点について、どの点に最も大きな比重をおいて授業活動を展開しているか質問した結果は、表8のとおりである。社会福祉学科の教員は、⑤「学習の成果や結果を口頭や文章で表現する」18科目、②「学習目標や内容を自ら認識する」15科目であり、この2点に重点をおいて授業活動を展開していることが明らかになった。次いで①「問題（学習課題）を見出す」が14科目であった。さらに、学年別にみていくと、⑤「学習の成果や結果を口頭や文章で表現する」の視点は、2年次、3年次、4年次の科目において最多であり、1年次の科目においてもこの点を意識していると答えた教員数が多く、学年を問わず、重視していることが明らかになった。②「学習目標や内容を自ら認識する」の視点については、4年次、1年次、2年次の順で科目の回答が多かった。これらの結果から社会福祉学科の特徴と教員主体的学習態度育成を意識して授業活動を行っていることが明らかになった。

表8 【社会福祉学科】「主体的な学習態度を育成する」ことの視点の意識と科目

学年	科目	①問題(学習課題)を見出す	②学習目標や内容を自ら認識する	③学修資源や手法を知る	④自己学習を進める	⑤成果や結果を口頭や文書で表現する	⑥学び方を様々な場面で活用する
1年次	1	○	●	○		○	○
	2	○	●	○	○	○	
	3	○	●	○	○	○	
	4		●		○		
2年次	5	○	●	○	○	●	
	6	○	●			●	○
	7		●	○		●	
	8						○
3年次	9	●	○	○	○	●	
	10	●	○			●	○
	11	●	○			●	○
	12				○	●	
	13	●				●	○
	14	●				●	○
4年次	15	○	●	○	○	●	
	16	○	●			●	○
	17	○	●			●	○
	18	○	●	○	○	●	
	19		●	○		●	○
	20			○		●	○
	21	○				●	○
合		15	15	10	8	19	12

学年別に6つの視点から該当が多いもの●

また、「主体的学習態度育成」の6つの視点を講義、実習、演習という授業の形態別にみた結果は表9のとおりである。これによると、授業形態により、意識する視点に大きな違いがあることがわかる。すなわち、教員により違いはあるものの、講義や演習を行う際、意識するとして6つの視点が全て回答として現れているのに対し、実習の場合は、①、②、⑤、⑥の4つの視点に限られていた。実習は学外の施設で行われるということから、③「学習資源や手法を知る」、④「自己学習を進める」点において、教員の意識化が見えないことが明らかになった。

表9 【社会福祉学科】授業の形態別に見た6つの視点

授業形態	①問題(学習課題)を見出す	②学習目標や内容を自ら認識する	③学修資源や手法を知る	④自己学習を進める	⑤成果や結果を口頭や文書で表現する	⑥学び方を様々な場面で活用する
講義	7	10	9	7	11	5
演習	3	1	1	1	3	1
実習	4	4	0	0	5	5
合計	14	15	10	8	18	11

（2）主体的な学習態度の評価

学生の主体的な学習態度が育成されているかどうかの評価は、極めて困難なことと思われる。調査用紙への記載は、具体的な事象として、①出席状況、レポートや試験の成績という回答があったが、②学生の態度変容や自己認識（抽象）ということで、「数量化することは難しい」という回答であった。

3）「ケアマネジメント論演習」担当教員による主体的学習者育成の評価

4年次の3学科合同実施科目である「ケアマネジメント論演習」を例にとり、主体的態度育成の6つの視点がどの程度育成されているかについて、担当教員16名中10名へのインタビューを試みた。「学生がどの位、達成できているかと思うか」を5段階評価で問うた結果（平均）は図3のとおりである。教員は、成果や結果を口頭や文書で表現する力など成果発表の能力を高く評価し、教員のサポートのもとで自己学習を進める能力も高いとしていた。また、学生の意見交換、課題達成への資源収集や人的資源の活用能力、資料の作成やプレゼンテーション

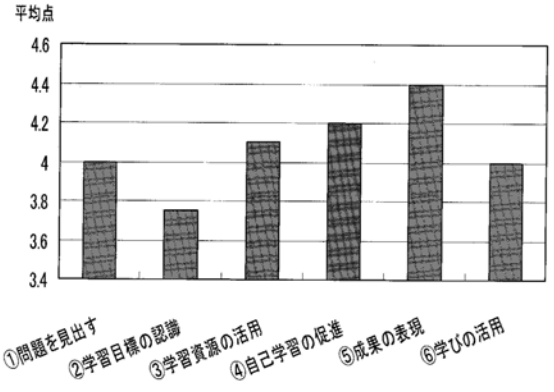

図3 「ケアマネジメント論演習」における主体的学習者育成の評価

能力は高く、専門的な知識に関しては、お互いの専門性を尊重しながら主体的に学ぶ姿勢があるという評価が得られた。4年次後期の学生の主体性は5点満点中4.0と評価されたように、多くは主体的に学習し、日ごろ目立たない学生も力をつけて、リーダーシップをとれるように育っていた。但し、自らが目標を理解し認識する部分の点数は他の項目より低い結果であった。その理由として、目標の提示、進むべき方向性の示し方があいまいな場合は学生がとまどうという意見も聞かれ、教授方法の工夫に関する示唆が得られた。

V．主体的学習者育成システムの支援体制

「主体的学習者の育成システム」の学内の支援体制（経費面含）については、次のとおりである。

1．教育・研究等に対する助成制度等

教員の教育活動を支援するために、開学以来、特別研究助成を研究研修センターにおいて行ってきたが、それには教材開発研究等も含まれている。さらに平成14年度からは教材開発・教育方法開発のための教育改善助成研究を開始した。毎年多くの教員が助成を受け、意欲的に研究や教育活動に取組んでいる。それらの成果は、研究談話会、研究研修センター年報や本学紀要において公表され活用されている。

2．国内外の講師招聘によるＦＤの開催

国外の大学（アメリカ、カナダ）から専任教授や客員教授を招聘し、カリキュラムや教育方法についてシリーズによる研修会を開催した。また、国内の大学から講師を招聘して、授業評価や教育方法（ＰＢＬ）等の研修会を開催し教員の力量形成を図った。さらに、本学の教員を講師として研修会を開催したり研究会を設けるなど、教員間相互の啓発を図ってきた。

3．主体的学習者育成のための教育環境の整備

開学前から学生の主体的学習を支援する設備として情報処理室・英語学習室、専門の学習を支援する演習室を整備してきたが、開学後はそれらを学生が自由に使えるように体制作りに努力してきた。また、主体的学習に不可欠である図書館は、蔵書の整備を図る一方で、個別学習室やグループ学習室を利用しやすいように開館時間を21時から24時（平成15年度）までに延長してきた。

また、学生に対しても後援会による学習活動・卒業研究への経費補助、サークルやボランティア活動への助成、外国学生との交流など、学生の生活全体について主体的活動の支援を行っている。

Ⅵ．主体的学習者育成システムの成果と今後の課題・展望

本学では開学以来、主体的学習者の育成に考慮した取り組みを教員一人ひとりが推進していることが今回の調査結果からも明らかとなった。また、年毎にこのシステムは浸透し、講義･実習などの教育活動の他、年間行事、学生自治会活動、ボランティア活動、就職活動など、教職員・学生ともに主体的な活動の実施状況に実績が現れ評価されている。今後、入学生や在校生が主体的学習態度を培い、変革の時代において専門職者として社会貢献ができるよう、本システムがさらに良く機能するとともにその充実・発展に向けて努力を続けることが重要である。今後の課題は、①教員の評価として、担当科目の評価のみならず、学生生活全体に関わる主体性の評価、②学生の評価として、主体的学習者としての4年間の経年的自己評価、③卒業生の評価、④就職先など外部者の評価などを含めた主体的学習者育成システムの評価が必要である。また、さらに、地域を巻き込んだ支援システムの充実を目指していく必要がある。

おわりに

本システムの取り組みと実績の概要は、学生の授業評価、教員に対する教育活動調査結果、卒業生・就職先からの評価と全般にわたっているが、本稿ではその概要と教員への調査結果の一部を述べた。今後、卒業生も含めた継続的な検証と本システムの更なる充実と発展をめざし努力を重ねていくことが必要である。

（受理日：平成18年5月24日）